

「吾れ日に三たび吾が身を省みる。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝つるか」

これは『論語』の「学而篇」に記されている曾子の言葉です。孔子門下の曾子は、「反省」の重要性を説くとともに、自己の内面を見つめる必要性を儒家思想の基本として説きました。

自己改革や人間性の向上、事業発展や革新を図るためには、目的の確認や自己責任の視点から、これまで歩んできた道のりを冷静に客観視することが必要不可欠です。

しかし、忙しい毎日を送っていると、つい惰性へと意識が流れ、自分を見失ってしまふ結果に陥りやすい傾向にあるため、自己改革は口で言うほど簡単ではありません。改革を進めるには、変わりたいという強烈なる願いと危機感、そして己の価値観や生活スタイルをも変えるほどの並々ならぬ覚悟と実践、さらには自己否定とも思えるほどの自己客観の反復が求められます。

ドイツの政治家、オットー・フォン・ビスマルクは「愚者は体験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と言い、豊かに生きるには、歴史の反復性から見えてくる要素(事象・人間性)を学んでいくことが必要であると語っています。人は昔も今も、責任者たるトップリーダーが後方の安住地より指揮をとっていたり、人世のためと言いながら自己本位であったり、自己の正当性を誇張したり



後悔をするより 反省を後に活かせ

と、数えあげればきりがありません。先人たちが残した教訓を生かしているかを、自分自身に問い詰めてみる必要があります。「自分の心や行動がそのまま鏡のように人(組織)・もの・環境に反映する」のだと謙虚に省み、相手を責めることなく、まず自らが変わるのです。

真正面から己を省みれば、いかに自分が至らぬ存在かが理解できます。多くの人たちに支えられて、自己の存在があることを痛感させられるものです。

反省というと、一般的に後悔が入り混じり、暗くなりやすいと思いがちですが、「それは本来の反省ではない」と、倫理運動の創始者・丸山敏雄は言います。

「反省とは、もう過ぎ去った自分を、只今の外の自分がふりかえってみることで、善し悪しがはつきりわかる。この場合、ただ『そうだ、よし、これからはこうするぞ』と言うのはよいが、『バカなことをした、惜しいことをした、するのでなかった』ともう過ぎたこと、どうにも仕方のないことを、くよくよするのはよくない。後悔とは、こうしたことを言うのである」

倫理法人会の年度末に際し、これまでの自分を省みて、結果責任を潔く明らかにしましょう。新たな計画と決意が定まったなら、「組織改革は自分改革から」との当事者意識に基づいた率先垂範を心がけ、明るく平成二十三年度を迎えたいものです。

え・栗木 映